

第五節 武田・小山田氏の滅亡

武田勝頼の失政

天正六年（一五八八）五月の越後御館の乱以降、小山田信茂が越後への使者となつて外交の前面に立ったことは前述したが、天正三年五月の三河長篠敗戦後の武田領国の退勢は挽回すべくもなかった。内政的には長篠戦で宿老の多くを失ったことで、新参者の登用を計らざるを得なくなり、家臣団の対立を招いた。領国支配の面でも織田信長の後援を得た三河の徳川家康と駿遠国境で対立し、さらに西上野で攻勢に出てきた越後上杉氏に対抗するため、領内に課す軍役が荷重になっていった。天正三年（一五八五）一二月の一七か条の軍役定書（『甲府市史』史料編一、五九七号文書）では、軍役は知行役の侍衆にのみ課されていたものが、同五年閏七月の三か条の軍役定書によると、「領中の貴賤十五以後六十以前の輩」すべてに年二〇日の軍役が課されており（同六四六号）、その危機感も「当家興亡の基」と表現されている。

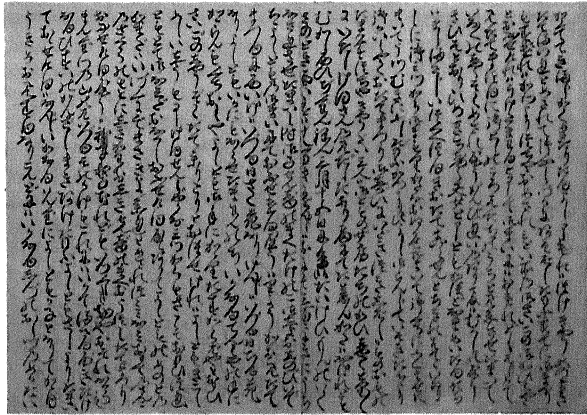
外交面でも一貫性がなく、天正五年正月に北条氏政との同盟関係を強化するために勝頼はその妹を後妻に迎えながら、前述したように、翌年にはこの同盟に反して上杉景勝支援にまわり、再び北条氏と対決するに至った。これによって小山田氏領の武相国境周辺は緊張関係が高まり、駿東郡や西上野での北条氏との対立が激化していった。天正七年（一五八九）九月の北条氏政の下総千葉胤富宛の書状によれば（同六八二号）、「甲相両国近年改めて骨肉を結び、別して入魂せしめ候ところ、其の曲なく表裏日を追て連続、とり分去年越国錯乱以来、敵対目前」と通知している。

天正八年（一五九〇）に入ると、武田勝頼が織田信長との「甲江和号」を進めているとの風聞があり、当時、越中で信長と対立していた上杉景勝からその点を詰問され、三月一日、重臣跡部勝資がそれは虚説であるとの弁明状を越後へ送っている（同六九七号）。この跡部勝資は甲越同盟の実質的な推進者であり、同じく越後への使者となった小山田信茂との職務分担がはっきりしない。しかしこの勝頼の動きが単に風聞でなかったことは、織田方の人質としていた御坊丸を尾張へ送り返していることによっても明らかである（『信長公記』）。同年九月には、徳川家康が遠江に攻勢をかけ、武田方の拠点であった高天神城（静岡県大東町）を包囲した。穴山信君の救援にもかかわらず、翌年三月同城は落城した。この時期、北条氏との抗争も頂点に達しており、勝頼は沼津・西上野と防戦に東奔西走していた。しかし、こうした一連の軍役に小山田氏が参陣した形跡はみられない。ただ、越後上杉氏のもとへの使者の役割は、天正九年（一五九一）五月までのものがみられる（古代・中世三三三）。

こうした状況のもとで、勝頼は同年正月になると、新たに防衛のための築城を開始し、同月二二日付の真田昌幸書状（『甲府市史』七二五号）によれば、韮崎の地へ新城を築くに当って分国中の人足を集めて普請をし、人足は家一〇間につき一人の割合で三〇日間とみえている。同年一二月二六日付の諏訪大社称宜矢崎氏宛の勝頼書状（同七五六号）によれば、新館移転の祝儀の礼をのべているから、ほぼ一年を要して新城が築かれたことになる。これは甲府館が政庁・居館としての機能が主で、城郭としては不備な点が多いことによる。前述したように岩殿城にも同年三月、荻原豊前輩下の被官衆が御番・普請役として送り込まれている。これは武相方面からの北条氏の侵攻を想定したものであり、それまで小山田氏の城として余り機能していなかった同城を最大限に活用しようとしたものと思われる。

天正壬午の乱 武田勝頼は、天正九年（二五）の年末に新府城（韮崎市）へ移転したが、城はまだ完成しておらず、ましてや城下の整備は着手されたばかりで、家臣や町人の甲府からの移転は進行していなかった。ともかく勝頼は天正一〇年の正月を新府城で迎えたが、一か月後の二月五日、親族であつて信濃木曾領の領主であつた木曾義昌が謀反したとの知らせが届き、勝頼は直ちに制圧のため出兵した。この時期には、徳川、北条両氏の攻勢に対処するため、将兵の多くを境目の城に派遣しており、勝頼の木曾出兵にはわずか数千の兵しか集まらなかったという。木曾義昌は織田信長に救援を求め、二月一日には信長が嫡男信忠を先陣として甲州攻めを開始した。

こうした状況は小田原城の北条氏政のもとにも知らされ、同年二月二日付の武蔵鉢形城主（埼玉県寄居町）の北条氏邦宛の氏政書状（古代・中世二三三）によれば、「信州の平地へ大軍が押出候はば、何とも防戦の模様、甲州なるまじく候」とあつて、すでにこの時点で武田氏の滅亡を見通し、北条方もこの機に乗じて武田領へ進出する構えをみせている。木曾に向つた勝頼は鳥居峠で木曾勢の抵抗にあい、織田信忠の出陣の知らせに動揺し、一旦新府城へ戻つて善後策を協議することにした。伊那郡へ入つた信忠は逃亡する南伊那衆を追つて、二月二九日に伊那郡の拠点城であつた高遠城（北伊那郡高遠町）を包囲し、籠城兵の勝頼弟の仁科盛信らに降伏勧告状を発した（同二三四）。その中に「勝頼は昨日諏訪へ引き退くところに、小山田を始め国中の侍が討ち出すべきの由を申し来り」とみえており、勝頼の退陣を機に小山田氏らの武田家臣が離反の動きをみせたことを報じていて、すでにこの段階で勝頼の支配力が失われつつあつたことを物語っている。しかしこの降伏勧告状にはまだ研究の余地があつて、にわかにはこの説を信じがたい。高遠城は救援のないまま三月二日に落城し、城主仁科盛信ほか石田系小山田氏の小山田備中守昌行・昌貞兄弟らは戦死した。

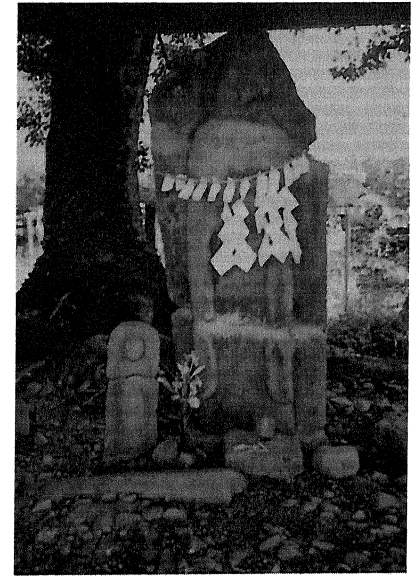


「理慶尼記」（勝沼町・大善寺所蔵）

織田側の記録である『信長公記』（同二三六）によれば、新府城へ戻つた勝頼は、三月三日早朝、館に自ら火を懸け、人質を焼死させた後に逃避を開始した。一行は勝頼夫人ほか一門・親類ら二〇〇人と侍衆六〇〇余人で、その中で馬乗りは二〇騎にすぎなかったと伝えている。『甲陽軍鑑』などによると、その前夜に最後の軍議が開かれ、西上野の岩櫃城代であつた真田昌幸が岩櫃城への退去を勧めたが、小山田信茂は自領の岩殿城への退去を勧め、勝頼はこれに従つたという。武田一門の勝沼信友の妹で、柏尾山大善寺の尼僧であつた理慶尼の書いた「理慶尼記」（古代・中世二三七）は、勝頼一行が郡内領へ向つた折、小山田氏の迎えを待つたため大善寺に逗留した際の記録であるというが、これによれば、小山田信茂は同月六日まで勝頼らに同行しており、七日夜半に人質となつていた母を伴つて郡内領へ戻り、その直後から笹子峠に兵を出して勝頼一行の郡内入りを阻んだと記している。

織田信長は三月五日、ようやく安土を出陣し、七日まで岐阜城に滞在した後、一日に美濃岩村城に着陣している。この間、先陣の信忠は七日に上諏訪より甲府へ入り、一条氏の屋敷に本陣を置き、武田家一門、重臣の探索を開始している。『信長公記』によれば、この日成敗された人々の中に小山田信茂の名もみえており、先の「理慶尼記」の記事と一致しない。『甲陽軍鑑』や『甲乱記』にはこの時の状況が詳しく書かれているが、小山田信茂が葛山十郎

解体とともに、甲斐国内は一時期混乱を迎えることとなった。



小山田信茂の供养塔（甲府市善光寺町）

信貞とともに甲府の善光寺で誅されたとあるが日時は明記していない（同二三九）。ところで前述した小山田氏の菩提所である長生寺の位牌には「武山長文大居士」とあって、その忌日を三月二十四日としている。しかし三月一三日付の信長より柴田勝家らの重臣に宛てた書状（同二四〇）によれば、すでにこの時点で勝頼以下を討ち果したと伝え、小山田信茂の名もみえていないから、その忌日は三月七日の方が適当と思われる。こうして、武田・小山田氏ともに滅亡し、武田領国の